

27 天保四年『花供養』

2014/07/23

底本 糸井文庫本

校異 白鹿記念館本

花供養

(題簽・表紙)

(裏表紙見返し)

はるはさくらをかざして
供養の場にみち、秋は真

葛の月に吟じて暁の

かねに驚く。嗚呼、花供養の

世にひろがり、四時流行の

遅速をあらそふ事、日々に

新にして、月々に盛に成り

序一才

て至らぬ隈もなし。こは
蕉堂のいさをしにて、
千載不朽俳諧の道場
とは成りぬ。

天保四年癸巳春

西湖山の北馬識

序一ウ

花供養

小構な塀やさくらのちり支度

つきたてゝ置春のぬれ柴

沢山にあつかふ海苔の束とけて

こける屏風をつかまへて居る

降かして人のざはつく向川岸

その場でわたす土持の銭

夕月に出たてたば粉をつみなをし

テリ

未だつばくろの残る旱年

芹舎

蒼虬

南溪

万籟

梅通

金菜

月峰

芳英

ちよつとした角力のはづむ西院祭

くつきり色のしろき髪ゆひ

いにざまの言葉にくさにつき飛し

ついは付木のしれぬくらがり

鐘つきもひとり男の兼あふて

昼寝の顔に蟻の這ふ也

(濁イイ)

えだ形でどつきり橋に遣りわたし

はやふ手垢の見ゆる藤柄

そろばんをもてきて習ふ宵の月

杜蓼

丈翠

栗哉

万丈

馬角

素洞

三志

一嘯

百池

一ウ

ことしは何処も渋ひ安齋

見つけると嶋も突さぬ屋鋪裏

立たる札も埋むごもく場

乗てから船賃ねぎる花ぐもり

なはしろ茱萸のはりに刺るゝ

新店の灯も賑やかに霞出し

子を負ながら膳を手つだふ

浪おとのつのはれば馬も荷をへして

湿病む顔のむさき日あたり

米友

若雅

座魚

梅價

玉叟

十亀

朝陽

三保女

梅窓

二才

町へ迄厄介かける弥勒堂

何の用もしれぬふる杭

下□の来やめば市のひつそりと

あつめてありく雨乞の米

炮烙の鵜のちらばふ棚廻り

(濁ママ)

そんぐりそげ(濁ママ)のぬけしうれしさ

おはぐろも見へぬ処へほかす也

牛につけたる薪マキのふり売

植木屋の冬糞嗅き朝の月

夢外

麦洋

光影

正阿弥

馬友

衆芳

伴橘

喜風

貨僕

二ウ

むしろめくつて洗ふ油石灰シツクヒ

あつらへし焼物鯛も不揃に

さい／＼吞めばきかぬ熊の膽

(濁)

ざ つくりと畳へ数珠のおちた音

けふの日よりに袷着あてる

まん中は誰も通らぬ大津道

屋根を葺やら竹立てある

つれ捜す人の又来る花の蔭

鳥居の数のふえるあたゝか

並隆

酔露

岱美

とせ

草躬

翁杖

恩古

岱李

李角

三才

下略

なく雉子にちら／＼うつる旭かな
掃きらぬうちに又散つばき哉
折れぬとて笑や花の川向ひ
うちやつて置た庭はくやなぎかな
十分に寝た船ついてはるの月
吹足らぬ風に柳のみだれけり
田の土のゆるむか雨に鳴かはづ
かたよせて船から打や岸の梅

丹波

俵瓜

吉丘

武陵

フクズミ

霞柳

桐雨

桐雨

知足

知足

豊栖

豊栖

渭川

渭川

ハタカメ

靈芝

三ウ

ほめる間もなくて手折や藪の梅
 杖ついで出る人はやし花戻り
 滞りなく流るゝやはるの水
 翌日は誰があるじとなるや山桜
 行春や鴉のたぐる穢多ヶ崎
 もりと子は別れ遊ぶや嫁菜摘
 何の木となしに交りて山ざくら
 杉かげに月ははづれて啼蛙
 井戸ばたにこぼれて有て齋さく

小ノ 古情
 天引 一知
 サ、山 観之
 花月 風所
 蝸角 洗耳
 氷カミ 万堂
 野卵

四才

手ですくふ瀬に流るゝや花の雲

二泉

繩繰クリの腰のして居る霞哉

既醉

余所の灯の明りがさすや花の間

真澄

灯をいれて花に労れたある(濁ママ)じ哉

黒井 露光

白魚に山葵の利たさわぎかな

全

つゞくつた風を持出す日暮かな

全

鶯や相手ほしいとおもふ頃

シノムラ蕉夢

傘の端で(濁ママ)こぼすや梅のはな

カヂハラ宗徳

温泉になれぬうちは寝にくし春の月

サハ山 冠雪

四ウ

来た道は人づまりなり花の中

カヂ(濁ママ)ハラ蒼々

あらし山にて

一床几のこるや花の泊り客

丹ゴミヤヅ本道

打かけたきのふの畑や雉子の声

文之

葉が押してしたむきに咲つばきかな

几雀

水末になれば粒だつ田螺哉

塘芽

しら梅や甲乙もなく花ぞろひ

夷白

小ともしにかけた雫もうめのはな

魚道

五才

かれ芦も沢山たてば霞けり

馬良

遊ばせてある寺畑やうめのは花(ママ)

タナベ

蕉山

雨になる噂して寝てはつ蛙

鉄山

何処に咲て汐ざかい迄落つばき

似藻

高タカみからみればのこらず梅のはな

一葉

やなぎとは又持にくし藤の花

北亭

雨だれの透見合せて御慶かな

可丈

鎌研て居るを見かけて桃の花

白水

雨の朝ちかくに雉子の鳴にけり

松翠

五ウ

垣のそと之もつまるゝ木のめかな

伴慶

うめさくや此ころまで(濁ママ)の無住寺

芦丸

あそび(濁ママ)人のあるや次／＼山の花

桃之

庭はきのちいそうみへて朝ざくら

柳圃

雛の顔のぞいた処に居ばりけり

東菊

あさみどりするや小まつの引残り

観音寺駄観

らうそくの片へりするや花の風

松尾寺静也

暮前に人の出て来るさくらかな

ミネ山春芝

おしたちて並び直るや蛙の子

白沙

六才

風の手のきまらぬやうな焼野哉
うぐひすやまだ寝所も出ぬうち
我耳のいざ垢とらん華に鳥

たとり
チハラ広居
出石 要鳥

高(濁マ)ば つた程は嵩なき薺かな

夕齋

白梅の明る戸待て匂ひけり
三日月を松にはづして啼かはづ
行春のかげや流て吉野川
夜深きに門掃くおとや初桜
逐へば又おはれて雉子の鳥音哉

蘆滴
古岸
蝶章
其然
雀子

六ウ

朝空や耳にひやりと雉子の声

但馬ハマサカ素六

あさ桜より見つくして夜のさくら

四暢

灯の消へて笑しづまるさくら哉

伯米子草台

膳にかげさして筆のはる桜かな

椿台

途中からふねに乗りはるの月

蒼館

流れ出てみな江に霞む家鴨哉

三眠

つき出した膳の先なり月と梅

完眉

うへ一重からげる花の戻りかな

伯今津とみ女

二三軒ふえるや梅のくばり先

有隣

七才

本家から食もの仕出す花見かな
手をつけて見ればつめたし春の水
旭さす流がそふて雉子の声
董ほど残して射場の掃除かな
隙なるをほしがる春の宿屋哉
鳥も寝ぬほどに折るゝ野梅かな
折たまゝ箕にのせてあるつゝじ哉
蠟燭の買置するや山ざくら
見かへれば霞んで仕廻華表かな

所子 一松
花酔
雲母里梢鳳
一帰
一徑
一橙
青蟻
冬山改虎嘯
成眉

うめのはな片足あげて折にけり
凧ふんでおどろく夜の田道かな
朝晩にかはるや雛の置所

もぎ折た儘にかたぐやもゝの花

行春や吹来る藁に鳩下りる

揃ふたとわか菜みせけり垣の外

たふれ木の田にある春の寒さかな

内にさへ居ればねぶたき木の芽哉

霞れて雑巾つかふ広間哉

院白

耕文

眉英

亮曠

大ツカ東鳥

金風

羽客

篤風

下ノカハ千月谷

八才

こゝちよき朝寝や花もきのふ切

松江

秋宣

箸とれば余寒うすらぐ真昼

松羅

花打た手の疵みるや風呂の

龜年

雨前と見込て焼くや夜の山

蟬羅

手に痘の出来て堀止むつくしかな

行脚

南峨

無年貢の畠も持てもゝのはな

完道

白羽

赤つばき寝に来る鳥のおとしけ

花考

野口から灯のちらかるや花もどり

春船

うら町は折たさくらで花見かな

猪洲

雀子をもどして囉ふ隣かな

思雲

もそつとにして灯を入れる接木かな

由雄

さき達の足袋ぬらしたる柳哉

石水

不遠慮に人の来て寝る春の雨

呉堂

鳥さしの竿の先からかすみけり

玉洗

津の町を出てから霞そめにけり

鶯律

(濁ママ)

飛こえをとび 勝たれたる蛙かな

松甫

里の子の繋いでくれる椿かな

女和今日

欲の眼で見ればさくらは山あかり

春涛

九ウ

呵られたあたり花見のよき場かな

石見 芦青

寝て居るはすもふ取也花ざかり

播魚サキ節之

貝売にけふも一ぱいはるのあめ

アカシ 壺中

大船のすはり心やはるの月

苞竹

ふし／＼のくろむや雨のつく／＼し

寿鶴

遅ざくら家の間も下り上がり

三木 文郷

鶯や日はさしのぼる作事垣

耕雲

杓の柄のみなぬけてある余寒かな

ヒタチ 曾夢

一寸と降る雨に出がはり延しけり

新宮 鼓吹

九ウ

永き日のゆくりも見へぬ大河かな

鶯の来て間のぬけるはなしかな

一輪で持てたる梅の林かな

どつかりと目がさめたれば帰る雁

礼いふて居る間におつるつばきかな

なまぬるき風呂にいれるや花の雨

長閑さや窓から囉ふたばこの火

ふる雛も交ぜてめでたくゆづりけり

友はぐれする蝶々や風の中

ウサビキ 五芳

今市 琴洲

ヒメヂ 寸外

布蘭

ツマ井 六英

備中 倭一

ビンゴ宮内蕉雨

ヒロシマ 甘古

青尾

菜のはなや抹香はたく水車

笠居

サイフ

財布から出すや土筆とはした銭

霞卜

どの木ともさゝれぬ花の盛かな

文衣

柳よりうへに見えけり桔槔

上ノ関

栗堂

三度食ふ飯のうまさや花盛

全

朝掃除して数えるや燕の子

山口

風阿

夜の花風邪ひく声もきこえけり

白マツ

鼓吹

橋守の戸の内にある齋かな

チクゼン士焉

よし野にて

一〇ウ

高みから連レよぶ花の木の間か
しをりせん行道／＼の梅やなぎ
さした形り柳のあをむ畠哉
氣のつかぬところへ一つ露の臺
ひく汐の朝風ぬくし蜺とり
上座からむいてまわすや露の臺
木をたふす音もしつかり霞けり
隣から荷鞍乾かす椿かな
ふまれても開きおふすや露のとう

蕪園 五岳 竹薺 松岳 樵山 漱石 魯童 秋萍 汀洲

一一才

花の中そつと畳みし日傘かな
啼盛る程うぐひすの人ちかき
鶯の影もふりむく日南哉
万歳のかるみて這入戸口かな
戸をたてるたびにはさまる柳哉
錢投て橋越かゝるかすみかな
持前の花のしめりやけさの雨
朝寝した座頭もどるやわかれ霜
裏手から見るや桜と山ざくら

春岱 友董 対山 其風 立沙 尺歩 月平 綺園 遅柳

一一ウ

うごく木に又眼のもどるさくらかな

青柳や朝湯もどりの長咄し

夜雫を待て咲たるさくらかな

出る船に手燭さし出すやなぎか

汲あぐる釣瓶の中のかはづ哉

たばこの火借りてきの付く柳哉

川ひとつ隔てさむき野梅かな

春草の上に鍋置小昼哉

ちるかたに向ふてすはるさくらかな

野竹

南礎

女徳順

五春

南室

梧栖

南枝

壺天

宇逸

一一才

雉子なくや水はすら／＼草に入
日和から先づほめて出る茶摘哉
物しりの家を尋てうめのはな
あと掃除する気もつかぬ花見かな
田の神をゆびさす方や揚ひばり

柳には不★流るゝしみづ哉

(★偏は西に甘、旁は斤)

蔵跡が見えてさくらの古木かな
葉がくれにつぼみの残る椿哉
目にたゝぬ銭つかひけり花の留守

青羅

聴雨

柳圃

甫六

砂北

柴扉

松鼠

青圃

生白

一二ウ

ひとり言いふて居也山ざくら
啼かぬ間も鶯見ゆる木の間哉
やなぎにも松にも月のおぼろかな
行春やひとすぢみゆるふねのみち
野に出れば直に眼のつくわか菜哉
踏ばつた足袋のよごるゝ根芹哉
苗代やぼて／＼桐の雨雫

泡消たあとに浮出る蛙哉
眼やすめに古井戸のぞく桜かな

(★禾偏に、
旁は胃)

北令 和風 酒丸 女里月 円斉 既睡 ★栄 杉露 二蝶

息休めするや真下になるさくら
うぐひすやまだ鳴ねども来た様子
梅散や泥の乾きし葭の中
草の根のもげて流るゝぬるみかな
うぐひすを待つには邪魔な筧かな
月の出て遠くなりけりうめのはな
しら梅や夜あけて寒き夜着の垢
船頭の客ぶり作るはな見かな
涅槃会やついでながらの無音はれ

松二
臥山
一予
石岱
女惜花
乙牛
飛木
九玟
未央

ついで来た子の淋しがる茶摘ツミかな

みちばたにこぼしてあるやつく／＼し

仰向て小社見るや花の中

織さしの機片付る雛かな

夕東風のたるみを待や手繰舟

うめさくやまだ四五寸の杉の苗

端近く並べてあるや草の餅

摘みさしの茶園見廻る雨間哉

畑ひとつひらき仕舞や竹の秋

路丸

一操

玉卮

桂女

桃翠

器洋

棠居

柳志

延子

笠借りに行けば隣も茶つみかな
川明きを触て来る也雉子の声
今年又おる枝もなしうめの花
たしなみの羽織来て来る余寒かな
物事を気やすにするも二月哉
子すづめに連れて飛けり親雀
夜の明けて月さす春の障子哉
菜のはなの咲けば隙なり畠ぬし
紅梅にきのふ作りし折戸哉

里楽 温故 芦舟 環翠 雪幸 月秋 霞山 帰橘 冬蟻

家建^{タテ}て苗代頃になり^{タテ}にけり

颯下

巡り合塵の花也やまざくら

砂童

柳見る剋限はやくおもひけり

行脚雪丸

きれ風の松にかゝりて揚りけり

翠流

糊の干ぬ行灯出すや花の宿

亀笑

鶏の尾につけて歩行やちるさくら

寿扇

水汲の顔で分たるやなぎかな

呂舟

出がはりやつけかえて置釣瓶縄

石居

春風や見て行ほどの廻りみち

柏翠

華表より先に眼のつく桜哉

菜のはなを廻りて這入戸口哉

玄関に夜はいれる也いかのぼり

挑灯の心得はなき花見かな

旅もどりともししてみるさくらかな

汲んで置水に花ちる在所哉

陽炎も立て流るゝ筏かな

春雨の晴口見えて藪つゞき

苞提げて野を行人や夕霞

莫薦

月舟

鷺友

兎川

漁洋

関雫

自考

再可

若拙

畑打の休み所か山ざくら

雉子なくや浪たちやすき朝の海

かへるさに驚く花の深山かな

宿引の遠く出て居るさくらかな

日の出て雫こぼるゝ野梅かな

桃ちるや拾ふて捨る田にし売

それ／＼に浦はかね撞霞かな

鶯や月の残りし池の上

梅ちるやさむさはなれし山畠

梧丈

遅桃

馬槿

五涼

一桂

湖風

一二三

渡川

小翠

なの花や始終東風たつたばこ盆

斗丈

一番を直きりて買也初若菜

秋月 嗒然

菓罐茶に奢のつくや八重霞

チクゴ本マ樗雲

親になるすゞめの瘦やはるの雨

クルメ 幻化

ミチ

道づれの出来て春めく山路哉

ブンゴ中ツ春暉

(ママ)

うぐひすの鳴てじつともしてをれず

日出 鷺風

初花に真さきがける鳥かな

国東 花六

炉ふさいで何やらほしやきのふけふ

ヒゴ高ハシ率彦

火をかりに寄や畑打人の側

八代 素椿

一六ウ

船わたる隙も只居ず小万歳
くたぶれた人の先行こてふかな
筆飛て襖よごすや春ごゝろ
春の水石にて足をぬぐひ行
鶯の見たくなりけり啼た跡
朝はやう来て買はず齋かな
山寺や梅に切たる味噌の口
春風や出た気のかぬふところ手
咲出しておなじ日のなき桜哉

クマ本

仙斧

アマ草

三考

大ムラ

正焉

素琶

露満

一兮

淇水

一七才

うぐひすの鳴や鴨居にひく油
松明をふりあてゝ退く柳かな
鶯や二重障子のうつとしき
帰る気になれば小寒き桜哉
まん中に花を置けりわたし舟
万歳のくさめも舞のひとつかな
雨止んで鶯直にきたりけり
うめ折るや一よい枝が瀧の上
鶯やきのふ迄見た藪のとり

太素
素遊
梅左
其青
樗山
春圃
寸長
悠々
長サキ
駟童

夜ざくらや懇意の向は廻り酌

万年

雨の花おもへば春はいましばし

有来

鶯を側になかせて花見かな

茄★

(★西偏に旁は喬)

一処に足のとまらぬ桜哉

鶯居

しどけなきふりあり花の真盛

歌樵

隣から今度は誘ふ花見かな

魯丈

ちる花を集めてみるや酔まぎれ

李井

花ちるやぼつ／＼とれる灸のふた

加尺

橋かげに僧も出てゐるさくらかな

甫旧

一八才

かしこまる檀那の前の柳かな
不断焼く煙のあとのさくらかな
花の中耳につく蚊に逃にけり
むく起に鳥渡はさむし花のかぜ
あんまりで顔の出されぬ花見かな
年／＼に若き沙汰あり花の客
行春や礼した迄の寺の門
くさの蝶たしかきのふも居た処
行先は出てからにしてはるの風

諫早

北岱
素岡
史敬
棠雨
方居
梅逸
石慶
石甲
梅乙

一八ウ

髮剃にゆくやひら／＼春の雪

夜も無事に明る柳のあたりかな
手のひらに溜めて見る也藤の花

青柳や永ひ病気のなほり口

次の間の麩も花の仲間哉

春風に連れて行也大和道

加茂川に筆とりおとす弥生哉

花曇りするや越たき山ばかり

養生でひとり歩行や董みち

文似

美風

秀有

智水

止休

李井

九思

時習

霞林

又聞のはなしのふとるさくらかな

月江

灯ともりてみれば露けし白椿

泛湖

草の戸の視勝手に霞けり

梅士

島も家の四五十あるかいかのぼり

神代冬耕

鳥雲に入るや朝／＼茶の旨き

ウマ

涛堂

柳見て居ればほかりと番所の灯

青郊

(ママ)

億病のつく正月の寒さかな

素羅

今はなしした鶯の来たりけり

鷺洲

はつ午や雨と見うけてずし迎ひ

梧井

雲うごき水うごき出て夕柳

つく／＼しもらへば興もなかりけり

見処の隣に負るやなぎかな

花見へてからも又ある小橋かな

見さだめぬ空に下駄はく彼岸哉

朝雀ぬれて花から出たりけり

寝ぬ船の明りはふとし春の雨

風呂敷でしきるや花の台所

居ぬくもる足の痒みや梅の花

亀詠

蘭雪

撫松

一柱

全

五島 雪洞

ツシマ其雷

吾水

雷貢

帆ほばしらのもひとつみゆる柳やなぎかな

吐鳳とほう

矢走やぶ乗昼のりひるの支度しどや草くさの餅もち

淇園きえん

(濁ママ)

西須磨にしよまやさくらみる日の古ふるす だれ

孤巖こがん

(濁ママ)

灸あの香かのふところさめ ず 夕桜ゆふざくら

東指とうさし

すみやかに夜よははなれたり初桜はつざくら サツマカセタ吐月とげつき

うれしげな人ひと而已のみ十日じふにち戎子えいこ哉や

仝どう

初午はつごの人ひとの出でにけり垣かきの破やぶれ

日向本庄習之ひなたほんじやうしゆ

キラズ

きのふ見みし花はなの名残なごりや雪花菜汁せつがさいじゆ

南丸なんまる

花守はなもりやさかりになれば剛たけない顔かほ

立巳たちみ

折かけて見すかす夜のさくらかな
眼を閉て見るやきのふのはつ桜
雨だれのおさえて落るやなぎ哉
大連になつて戻るや若菜つ
ひた／＼と桃散つくや風呂上り
朝風呂の栄耀上なし花に鳥
一しきりちるやさくらは水の上
聞なれぬ声で戻るや春の猫
ちらつくや松のあいだの人と花

寿山
由吾
厚薄
尚故
曳尾
中ムラ 正葩
壺岐カツ本梅舟
アハ徳シマ橘茶
梅守

二一才

朧夜の須磨みゆる迄歩行けり

友樵

わき目から功者いはれて接木哉

向栄

菜の花の中になりけり常夜灯

鸞巢

はつ花やこゝろ覚もあるあたり

鸞石

蛙からさきへ暮たる門田哉

白地一秀

茶のしぬい時におもふや婆々が花

サヌキ和田ハマ今是

桑の雫をたらす張縄

千崖

町尻の築に小鮎の飛そめて

是

二一ウ

秋一本にあまる点合

テンガウ

山の月人のうしろへ又廻り

ふくろの柝のよほどある嵩

カサ

やぶ入にお寺の犬もつれ歩き

(ママ)

暗いところで見えた億病

手拭をくひさきながら啞をつき

はした金ではいきぬ池上

雨がちで積りの違ふ瓜なすび

飲み相談にのらぬ馬医者

崖 是

崖 是

崖 是

崖 是

崖 是

崖 是

崖 是

一
二
三
才

這まはる百足を紙にひん捻て

ひとつもたゝぬ船の剃刀

根問した従弟京にはなかりけり

月を寒がる千川山伏

あちこちへ折らるゝ枇杷も花の時

はや来て呼はる辻の粥やろ

所化益もいかなたがはぬ遊行講

蔵のしまりに念ンついてやる

アイヤケ

姫といへばひとりは年わかに

是 崖 是 崖 是 崖 是 崖 是 崖

一
二
三
ウ

あそび勝手のちがふ城崎

落馬した後はふつゝり酒も止め

盲ずもふによらす腹すぢ

大祭小まつり秋にまたがりて

べそりと月にきゆる幽霊

樟脳やら何やら臭き廊下先

(濁マヤ)

たゞ 居り功者病み功者也

まめ銀をちよつちよと人にくれらるゝ

拝だ仲間の最う戻る声

是 崖 是 崖 是 崖 是 崖 是

一
三
才

盗まれてから鶏は置もせず

塀のあはひの竹のはびこる

押水に押されて通るちり芥

あみにかゝつた公事が只済

湯上りの腹つき出して花の陰

鳥帰る時もらふ小肴

天鷲絨の帯に汐干の埃かな
ぬれて又一入白し梅のはな

観音寺

百泉
松堂

是崖 是崖 是崖

二三ウ

(濁ママ)

やぶ 入や先づ七兵衛が届け状

啄之

もゝの花さくや窺ふ古手買

瓜来

青柳に肩休めけり筏さし

木牛

ぬすみ氣に月かざす也梅の花

車良

昼からは弁当かるきひばりかな

車乙

はなちるや月夜鳥は只の山

車外

露の臺となりの用に立にけり

去高

道とひによればさくらの噂哉

タカマツ琴糸

うめ咲て女礼者のきたりけり

女梅花

二四才

手に物のつかぬ日和やはつぎくら

涼起

湯もどりや顔にひやりと春の風

待月

鷺たつて角ぐむ芦を見出しけり

名栄美

山焼や請合がたき翌日の空

李蹊

ついて来て駕籠すゝむるや春の風

三千磨

猿曳の先へ来て居るわたしかな

可都彦

てふ／＼にうか／＼付て廻りみち

女鶯里

さし上て子にもたせけり梅のはな

猗竹

(濁ママ)

跨つて手もとさげ けり風のいと

由キヒコ改呆人

二四ウ

京道へ出て藪越やはるの月

白トリ走上

鈴つけた小門も見えて啼ひ(濁ママ) ばり

峨眉

なみよけの草木にうれし春の月

河内 其岳

宿ひきに笠わたしけり藤のはな

今是

青柳を心おぼえや夜の家

茂椎

花も人も安げにみゆる平地哉

アハチ李長

はな咲て壁にしめりの月夜かな

民磨

日のす(濁ママ) ち(濁ママ) やふかれての びる大柳

岳龍

見た上を提て戻るや山ざくらモド

エ井玉泉

明やすき夜の小口也花に水

モ、カ八月亭

傾城のあふぎ(濁)にのせし葦かな

シヅキ 可権

淀川を間ぢかく見るや朧月

如水

五七間飛ぶおとのして夜の雉子

トリ井 花橘

一し(濁)ばり囉ふてすます齋かな

下ハタ 烏秋

あさ沢の闇ほのめかす柳哉

カウ 鷗池

ちか／＼に旅の望みや二日灸

ナカムラ直水

春の水杖ひくかたへ流れけり

女 暁梅

蓬萊の置所(濁)まで 恵方かな

、 玉梅

泡雪に焼過したり鍋の芹

鶴頂

菊苗のぬす人流行月夜かな

フク井星介

うぐひすの音にくるしむか飛は(濁イイ)づみ

ツ、井文似

物もうといふて来にけり若菜売

タナカ文鷺

二夜三夜梅にも減らぬ月夜哉

カタ、竹景

うめ香に茶を乞れけり小柴垣コハ

竹言

月もある哀は梅のちりごゝろ

李明

もゝ咲や障子に影のうつるほど

士堂

はきものを替へて逃けり二日灸

乙人

正月はみな向のよき戸口哉

うぐひすや一声跡の身は軽し

旭もつ禁の家やうめの花

雪とけてもとの葎となりけり

鶯にさはりやすらん茶のけぶり

さつぱりと浪のおとなき子日かな

手のひらに乗せてきにけり雀の子

抱き付てしめ縄くゝるさくらかな

何か降やうに見えけりおぼる月

シチ川

景中

月橋

青柳

春草

芦堂

雪橋

柳橘

龜島

全

一六ウ

捨られぬ山なり川の柳かな

亀文

庭掃いて柳行義に見たりけり

李堂

たつぷりと咲梅見たり梅の中

アヒカ

楚竹

モ

最そつとになりて桜にひろひ杳

ミナト

大麓

(濁ママ)

はる雨や子供のさがす座敷中

南音

畑ぬしに断りいふや夕ざくら

ニシ川

葛老

しら魚にもいふ朝の曇かな

エキ

芦邦

やま桜表は人の寄勝手

佳城

(濁ママ)

我がげの先しみ／＼と春の月

柳サハ

茶笠

海苔とりて居てこそばゆし足の痘マメ

竹夕ニ 茶城

立ざまや宿の紅梅月のさす

ス本 来青

磯臭き宿もかまはず花の雨

郡下 梅堂

夕暮もなくてさくらのさかりかな

亀跡

提げ桶の水ゆりこぼす堇哉

霞涯

見て置し去年の栞のはつざくら

ツ井 沌々

鶯も来そうなおとの笥かな

ヤナカ 杜来

年の寄ものとはみえぬ柳かな

杜業

ねぶり／＼見て行旅の柳かな

エチ川 秋橋

二七ウ

見きはめて切れれば落けり花つばき
山風に追れて出たり蝶ふたつ
咲花にさはりそうなる躰哉
囉てのち切枝のなきつばきかな

コヒキ

うぐひすに背中あはせの木挽哉

大(濁ママ)ズ 桑戸

いらぬ火のもやしてあるや春の雨
菜のはなや吹き合て行たばこの火
村中に名代の水や藤の花
屋根の荒直す間もなし梅の花

ウハジマ 素亭
一行 稼曉
雪瓢

二八才

野男の呵りぬ猫の遠がよひ
堀ごしに矢音きくなり木の芽時
青柳や臼にたまりし宵の雨
温泉じめりの浴衣ひやつく春の雨
うぐひすやちつとの事で垣の外
万歳の見えつかくれつ小松原
むつまじき中もみえけり雨の雉子
春風や二人になりしわたし守
鯉の背に添てうごくや落椿

兵ゴ

徐全 北窠 其橋 木兆 江居 九臯 枳堂 漆水 竹堂

二八ウ

月夜ほめ合て花見の迎ひ哉
村中に一本白きつばき哉

(濁ママ)

廻ら ず に窓からくれる柳かな

止鳥

飛乗れば飛出る舟の蛙かな

ナニハ

松隣

水うつておくるや苞の露のとう

盧中

梅折て響に蔭へかくれけり

蕪栗

エダ

折にくひ枝は残りて月の梅

正朋

はる雨や野を荒廻る朝鳥

眉岳

(濁ママ)

袖ね ち て万歳わたる小河哉

鼎左

あき俵茲へのけたしさくら咲く

千尋

隙のいる返事に添へてうめの花

庵女

田の魚に人立するや夕霞

菓翁

ホメ

褒られて折戸明け置椿哉

自龍

ちる花の中にもあるや思事

吐屑

待／＼し日の花にさへ無さたかな

幽草

方丈の窓も明きけり梨子ノ花

一肖

行春や宿の古駕結ひ直す

河内モリ口梅古

手療治のよく利く朝やはつ桜

サカヒ青隠

二九ウ

欲ぼりて折そこなひぬ梅の花

はやさで遣ふ庵の七草

ひばり啼野風の中の湯に入りて

賀の茶袋をよく配る也

積めるだけ薪を積^{マキ}せる朝の月

こぼれ残りも多^ミひ紫蘇の実

下略

ア
グ
ラ

下檀は胡座かいたる雛哉

檐★ (★居偏に旁鳥)

蒼虬

雨什

★ (★居偏に旁鳥)

虬

什

津
団積

芥子苗を持って出さるゝ温(マ)槃かな

女千町

ちる花を見れば折気の止みにけり

畚民

うぐひすにひと足もどる街哉

田日

柳見て船のくちつき止にけり

マツザカいはほ

樹にばかり咲ても居らぬ椿かな

普品

故郷も恋しうなりぬ花のかげ

槌柄ウラ筍荘

親子して柴結ふ花の麓哉

南岡

紅梅に春のしみこむ夕べかな

曳尾

先へいて人呼ぶ花の木蔭哉

霞塘

三〇ウ

うぐひすや雨気になりてつゞけ啼

川サキ

荷亭

梅もらひこぼした花も拾ひけり

梅塙

啼よいか鶯けさもおなじ枝

山田

杉堂

これからが社地堺也赤つばき

文外

挨拶もはれがましさやはつ桜

外松

(濁ママ)

石橋やじつとりぬるゝ朝ざくら

芦角

傍へ来て折枝はなし梅の花

在淵

(濁ママ)

かたげ 来て道のあかるき桜哉

菊有

店者の前垂かけや夕ざくら

昌風

三二才

何の気もなくてさくらの日和哉

(調)

ばつとして暮をいそがぬ桜哉

(調)

ゆく水の中にすぢひく田螺哉

春風に知る人多き塘かな

取付た鳥も吹るゝやなぎかな

春雨は吉野見に行たより哉

山吹やつい手のとゞく水のおと

桃さくやけふは酢売の門ちがひ

(調)

山道やひばりののぼる処まで

(調)

松扉

桑湖

松圃

桃圃

淇石

蚊亭

春余

一提

倭松

梅さくやちかづき出来るおく山家

玉梅

遅ざくらちるや船待家のあい

東居

奉加場に久しい思や花の雨

ナゴヤ黄山

養父入と見えて田道へわかれけり

吉田 玉養

山を焼く明りはきかず(濁イイイ) 厠みち

三岳

手拭の一文染ソメや春の風

苟美

雨の日も隙には見えぬ燕かな

蓬宇

坊中にひとり絶えず接穂好

水竹

吹て飲む茶にあり付や啼ひばり

東ウラ南畝

流れ来て芝に淀みぬ春の水

ヲカザキ波文

湖へ出張家尻やうめのはな

塞馬

鶏のほこりひかへて御慶哉

青可

菊苗の根分ざかりや奈良巡り

卓池

ちらほらと梅こぼれけり洗ひ足袋

稻居

うき立て咲に間はなし山桜

梅老

夜明から湯屋の賑ふ柳かな

梅岳

静なる椎の木陰や花の宿

朱芳

買ったての草履ぬらしぬ花戻り

五蓼

三二ウ

菜のはなやおして膳出す昼下がり

流芝

夏ちかうなるや鶯浜で鳴く

伊豆網代物外

うぐひすや啼場もとめに藪あるき

江戸 何丸

樵りのこす木の真中の辛夷かな

三千香

暁やさくらにぬるゝ鬼瓦

杜山

鞠子^{マリ}にて

洗足の湯にうつりけり春の月

武州ナカゼ^(濁ママ) 寄三

鳥の巢^スで先づ安堵する山路哉

史千

ぬれたれば庇にとゞくやなぎかな

新川 荷少

三三才

夜のふけてさ (濁ママ) がすや海苔の遣ひさし

得蕪

腰かけて草臥の出るさくらかな

万頃

神棚へ置けり海苔ノリのあぶりさし 濁ママ

淀バシ小圃

木陰なきところで消えぬ春の水

一楼

駕籠舁のよく知てゐる柳哉

エド 南涛

浪杭に四方見てゐるつばめかな

卦龍

年玉の手拭おろす花見哉

千輅

盃へ先づ請にけり花の露

亀稗

何かまだありたう見えて雛の前

了知

三三ウ

蛙啼ばかりに更けて隅田川

麻交

山の木のあらために出る二月かな

有月

咲出してからも伸るや藤の花

松什

連翹や爪マ立てみる小藪ごし

浜吉

梅持て這入るやはり梅の家

抱儀

行春を心せわしき若葉かな

大梅

泥草鞋はたいた木也やま桜

梅室

人の行あとさへゆけばさくらかな

下フサ佐ハラ桐雨

梅の花手札を出して詠めけり

ツノ宮比古

三四才

灯ともせばきつと霞むやかゝり船

上ミシマ子行

銘／＼に旅人潜る柳哉

田湖 之桂

山桜わけ入過て里ちかき

馬ハシ 斗圍

昼しばしくつともいはぬ蛙かな

雨什

おい／＼と返事しながら接穂哉

植房 方舟

田から田へ水こすおとやおぼろ月

吳郷

串海鼠干す家の並んで初乙鳥

梢陽

搦手は十日も遅きさくら哉

梢山

物さがす手燭でみるや巢の燕

神ザキ 村丸

家の棟の雪は解たりうめの花

唐がらし焼は隣かはるのあめ

淡路島へ鳥も通はず朧月

三日月の跡はさくらの月夜哉

欲ぼりて雨にあひけり花の中

ふところ手してつまづきぬ春の月

年寄の小橋懸ケけり梅の花

折らせぬといひし桜も散にけり

きさらぎやかゆき処へ手の届く

香月

江口ノ里幻芝

野巢 川風

里風

一晷

吳剛

玉子

ヒタチ安久良一兆

ツクバ 風実

三五才

梅折て 億 病直す野道かな

小川 よし香

老ぬれば花にも泪流しけり

上毛前バシ嘯洞

心ほどうごきもやらず花の風

宜得

折心今さらはなにへだちけり

許友

横町へ流れ出しけり春の水

足利 嵐斎

うぐひすや尋あてたる酒勾川

ヒコマ 素考

昼からは市も立けり春の雪

栃木 みち雄

蓋とれば月のさしけり若菜籠

南部五ノへ文喬

山間にしばらく照や春の月

蕉秀

持こした花草臥の入湯かな

スギ田 英泉

院内をちかみちにする二月哉

丁酉

花の香やおなじ桜に深く入

秋田 国彦

夕暮は花のうしろへまはりけり

御風

(濁ママ)

おくれても残りはずま じ 小田の雁

佐渡小木 良談

揚ひばり若菜畑のあたりから

信州長ヌマ一琢

咲過てさびしき門のつばきかな

鶉村

帆に風のきかぬ日和や春の行

木ノ下 石鳴

(濁ママ)

軒並をちがふた家の梅の花

ヒダ 高山有美

はや一人二人見て行柳哉

加州シマザキ玉汀

鶏のさが(濁)した跡や露の臺

アハカサキ如翠

春雨や軒にかた付馬の鞍

淇汀

蜂払ふ扇の風にちる桜

兎郷

川船の苦(濁)ざらつかす柳かな

篤治

履ものゝ心ハキにそはぬ梅見かな

金沢 掉江

芹引てきて我きりの子の日かな

太甫

種苞や大事そうにも扱かはず(濁)

文草

損せずハキに一夜こしたりかゝり凧

曾魚 三六ウ

(濁ママ)

折らぬ人ま で 呵らるゝさくらかな

超翠

摺墨のかはきもはやし梅のはな

一身

提灯の火も間にあはぬさくら哉

正川

匍匐てすみれそろゆる社檀哉

素海

クモ

雲に乗やうにおもふや花の奥

暮白

夕雨や雉子と真向に居る座敷

白樹

あとじさりして見る月の桜哉

錦石

踏んだのもあとで取けりふきの臺

立介

風除をのけるやぐわつと梅のはな

宇牧

三七才

(濁ママ)

梅折てわけ(濁ママ)て置けり井戸の内

吸物の塩雁うまし帰る雁

(濁ママ)

鍋洗ふ手もとの草や鳴ひ(濁ママ)ばり

藪入の小もどりするや戸口まで

手の油おり／＼ぬぐふ花見哉

ちよつと置仮り橋流す雪解かな

大きいとはじめて知るや春の雁

声かけたばかり花見の戻りかけ

帰る迄灯はたてさせず花の中

素洞

一雄

知雪

春峰

禾曉

三志

其麦

淇亭

碧山

三七ウ

納家へ行折に見て置ふきのたう

可杏

瀧にさはる枝もありけり遅ざくら

疎蓼

寝つかれぬ夜は朧なり猫の恋

一洞

石壇のひと足づゝにちるさくら

鴟池

塞ぐ炉もひとつは翌日へ延しけり

大聖寺北園

養父入の知つた森なり聖護院

木雄

食た事のなくとも摘む^ッや露の臺

風竹

さくらから道も付う(濁ママ)ぞ 谷の家

田鴻

わか草や今起て行鹿のあと

桜々

三八才

山吹やこれから末は深ひ川

桃夏

下駄で出て草履で戻る梅見哉

理竹

よつぼどの嘶好なり梅のぬし

呼亭

さし水に濁る井もあり雪解時

丹嶺

菜のはなや出水の跡のふりもなし

葭流

はつ花や樽にかけたる宮の鍵

小松里魴

真直に烟のたつや花の中

ノト宇出川桃幼

ごもく場に能しだれたる柳かな

七尾楽斎

うつくしきひとつ家もあり梅の花

ゆみ

三八ウ

重箱の中へ入りすみれ草

七尾

貞章

磯の雉子ふた声めには立にけり

竹塙

いけてからきつと場の有柳かな

六皎

一木づゝ夕かげ持つややま桜

古雀

おき／＼や梅の匂を嗅てみる

淇園

花の夜やふとんひとつに客ふたり

路蓬

(濁ママ)

乙鳥のくゞる程巻く簾かな

スダレ

松美

はなちるや着替^キとり出す挟ミ箱

半江

ちる花も同じいろなる椿哉

女閑月

三九才

青柳の外に当座の風もなし

越中魚ヅ僊衣

医者の子のいちはなたつや凧

乙雄

一泊りする気で出たり山桜

馬水

夕ぐれは雨の姿の柳哉

秋叟

裏のうめ表へにほふはつに哉

椿才

ハヲリ

惣／＼の羽織提たるさくらかな

樂水

永／＼とくろゝ戸ひくや梅の花

滑川

竹鴉

朝からも人の見に来て初桜

竹遊

つなぎ置馬もねむるや花の奥

文甫

三九ウ

きれ風の行ゑしらせてわたし守

三有

毎マヒ日の入相きくやうめのはな

文和

垣根にも一株はえる薺かな

子光

去しなに一声たてぬ朝の雉子

イツミ東川

むく起や苗代見舞足駄(舞)がけ

ト山 乙峰

ふた船に万歳わかる伏見哉

木司

影もちて庭中になるさくら哉

丈水

初鴉先の一羽はまだくらし

如寥

杉垣の内の畑やもゝのはな

凡丈

四〇才

山人はありやう申さくらかな

葦村

花盛鞍なし馬も借りに来る

エチゴ上十日市守白

ねころんで扇かざすや散さくら

ホリノ内 巨童

うぐひすのはれ／＼と鳴く榎木哉

松舎

夜の桜しばらく松とおし合ぬ

村松 北坡

とう／＼と落る篲やうめの花

蓬亭

松かざり嬉しき事は過安し

庭月 誼老

もゝ咲や見たより鈍な料理茶屋

万里

花の雲人のおろかに暮にけり

シマクラ 荒永

四〇ウ

樹に階子わすれて置いて春の雪

糸魚川 曳尾

山中のさくらにおくや昼の月

雪郷

障子まで影さす蝶の日和哉

若狭西津竹子

白魚や水もほかさで買て来る

杳見 魯齋

はなざかり箸をはなせば出る工夫

エチゼン丸ヲカ三巴

打越て行なり花の日和雲

秋扇

宵月や花のきらめく雨の跡

夏扇

濁ママ

呼込んでつゝじみせけり茶屋女

鹿雪

七曲り八峠下りてはつざくら

振々

四一才

足がゝり能い瘤あるや梅の花

大ツ 舒六

陽炎の中へ掃く也ふねの(濁)こみ

蕙布

灯のあふつ風は花より起りけり

東蒼

足に実ミの入る宵／＼や花盛

米友

草臥の出ずに濟けり花の旅

サカ本 蔦雨

出代の足袋はく里の小口かな

土山 石鼓

巢を立て瓦すべるなすゞめの子

可笑

ふるひ出す袂の土や踏の臺

月扇

用にたつ嫁菜はつま(濁)で つむすみれ

虚白

四一ウ

陸尺の引ばつて見る柳かな
五六町よれば門あるやなぎかな
身の廻りなんにもなしの花見かな

仁正寺一嘯

日野 和月

芋丈

不二垣の一夜ひとおり

連翹やひけば隣へ花のむく

八マン桃谷

留主する事もやすきあたゝか

嘉涼

巢をおちた雀に親の啼たてゝ

谷

水かけて置杉の元皮

涼

茎菜^{サイ}てひと櫃あける朝の月

谷

四二才

おどり衣装をはやう着よ(調マ)ごこす

盆掛ケもすつくりとれし四日市

軒のはしらをはめこみにする

積んで置檐桶にしぶきの吹かゝり

添乳して居てとろ／＼と寝る

弟も表向ては逢ひにくき

畠もくわつとあかき千日

切売の真桑に月の落かゝり

按摩の笛も夏むきは減る

涼 谷 涼 谷 全 涼 谷 涼 谷 涼

四二ウ

顔役に一人道者のさかろふて

手水場のない祠さびしき

こつそりとして永ふ咲藪の花

出かけてあとへすくむ穴蜂

右一折

今見えた帆もはや巻て春の月

藪あいや不思議な程の遅桜

石壇に水のつとふや春の月

大船へ呼れて居るやわか菜売

八マン

谷 涼 谷 涼

梅井 嘉涼 素白 白朶

四三才

足いれてみるも日永き流れかな
灯の入て見歩行町のさくら哉
一枝をかたげて戻る花見かな
一橋はかけてありけり花の道
春雨にしつとりとする布子哉
背戸口も明けては置けと雨の花
来た足で一ぺん廻る花見かな

(調)

にぎやかな初や ぶいりの夕哉
人の来て座鋪にするや花の中

雪居

起蝶

乙雅

白哉

百酒

四明

梅三

蘭月

太令

四三ウ

万ざいのはなしして行米屋哉

仙李

はつ花や膝ヒザはちよぼ／＼酒の罍カビ

真なか

横の座に立せてあるやむかし雛

一朝

山吹や不取しまりなうらの垣

夜外

さわがしとおもふや我も花戻り

芦洲

咲きりし花にひと夜のこゝろせき

水景

本道へまわつて行や花の連レ

鷗水

吹革ふく門からおぼろ月夜哉

江ガシラ湄南

犬の子の體カラダ痒がるかすみ哉

田中江万月

四四才

食すてにしてある花の座敷哉

アサ小井鳥都雄

串柿のあまみもぬける霞かな

カタ、成章

一むしろ本膳並ぶさくら哉

文葉

嚏のあと心ちよき雉子の声

蕪城

蓬生に片つら咲ぬ岨の花

禾郷

砂潜り行や柳の下流れ

世岐

陽炎やちよと休むにも横になる

雲水 支鳴

雉子なくやけふがはじめの握り飯

舟木 一駒

雉子鳴や林の中も水のおと

川島 嗽石

ハヤシ

四四ウ

船よせて見ればちり来る桜かな

隅井

ところ／＼山に灯のあり春の月

玉山

ちかみちをして隙のいるすみれかな

松月

今もちるふりや桜の水うつり

太田
麦村

はつ花や見付ながらも渚の上

蕉雅

住かはる家もさくらのさかりかな

魯山

灯のとゞくだけの事なり夜の桜

嶺月

また迂る処ある道やはつざくら

湖領

ひや／＼と花にさは(イイ)がし夜の瀧

榎扉

四五才

留主の戸もさゝずに置や花ざかり

草父

ついは気のかぬ処や遅ざくら

高シマ雪山

油断して風雅引込し梅の花

音羽 田美

さはがしき船場の空や帰る雁

大ミヅ麦洋

取つきはよき影もあり山ざくら

一居

帰る気のそろへば月の桜哉

ワラソノ漁村

(濁ママ)

梅さくや黒 ぼこ道のははり

万木 北馬

夜の雨春はこゝろに闇もなし

文嶺

(濁ママ)

花持て出るや戸口をあと じさり

五十川節外

四五ウ

うぐひすや朝から濁る河の水

ちる花に一むれ山を越る鳥

川こした事はわすれて花もどり

鹿聞に又行筈や花の山

先づ吉野向ひて歩行や春の旅

ふところへしづ／＼ふりこむ柳哉

今も降空に灯を増す桜哉

寺とさへ言へば先づ有さくらかな

ひと安堵するや桜へ小半道

淀 辻沢

鶴丈

白司

鹿彦

秩草

雲峰

源良

其友

友之

吟風

四六才

竹の根もゆるぎ(濁ママ) そうなり雉子の声

三千丸

五六日犬もはなれぬさくらかな

春来

うち越る山のとぎ(濁ママ) れやうめの花

雪川

鳥はみな晴きる声や春の山

兎齋

庭ざくら家に勝しと指さゝれ

支雪

菊桐の紋でふさ(濁ママ) げる桜哉

掬水

花の主見てゐる隙はなかりけり

大之

明行やみな日帰りの春の山

軽舟

小座敷へど(濁ママ) つと持て来る桜かな

一坡 四六ウ

粉炭まで焚仕舞たる弥生哉

魚物

今下りる野をかられけり鳴雲雀

赤水

啼ひばり笹一枚にかくれけり

素琴

眼を摺つてたしかにしたり初桜

サガ

丈翠

凧あげて豊かな島の畠かな

梅通

いり日にひとつ帰る鈴鴨

並隆

立ながら五加木のしたし手にうけて

万籟

残りすくなき箱の蠟燭

芹舎

四七才

上役のかはりに居ばる朝の月

ズ、ダマ

ことしもひとり生えし蕙苴

ウ

勘定もたてずに仕舞下り築

雨ぐもなしに伊勢へ出かける

めづらしう湯屋の鉄の能うきれて

疵なりに袖のはける冬向

のろ／＼と会式やすみの大工ども

糞ンした犬にかけるゝ砂

藪山を登つて下りる月の宿

南溪

蒼虬

栗哉

通

隆

籟

舎

溪

虬

四七ウ

只居る者は居らぬ秋入

粉ぐすりも水では飲めぬひやゝかさ

濁ママ

立寄合のどふど 日暮れる

大網が花のさかりに出来あがり

彼岸ぶくろも集らぬ年

東風吹ばいつでも煙る台所

膏薬踏んでつまだてゝ居る

裁かけてくる／＼まはす松の向

(濁ママ)

三日にあげず肴屋のわび

通哉

隆

籟

舎

溪

朝陽

哉

虬

四八才

ホコ
鉾町で無うても多き人通り

隆

(濁ママ)
かたづき先をそつと見て置く

通

(濁ママ)
ゆづられて分んに過たるわたしがね

舎

(濁ママ)
木の実あぶらの灯口すりこむ

籟

鶏しめた手も洗はずに横になり

陽

名主の損のかゝる村中ウ

溪

(濁ママ)
お旅だけ屋根の出来たる暮の月

虬

ぽつと赤らむ柿が四五本

哉

ナウ
酒造るあいだは遣ふ水車

通

四八ウ

石なぶりして切らす細引

拾ふたる財布そこらへ見せ歩行

休みあげくの床はひつそり

土橋の際ま(一ノノ)で 花は咲つめて

活キてるやうな釣台の雉子

かすむ日や二階ばかりの上がり下り

舳ひとく眼先へ来たり蝶一ツ

白魚やそゝいで落す網のはし

隆

籟

舎

溪

陽

京

金菜

貨僕
梅通

四九才

あれ／＼し重ウの肴やちる桜
しつかりと一りん咲ぬうめのはな
箕仕事にあふち散らすや軒の花
出もどりの気であてたりはつ桜
一人前腕かりに来るさくらかな
土手ごしの嘶蛙にまぎれけり
はつ花やおもひもよらぬ小ぐらがり
如在なう煙をたてゝ花のやま
道下手の眼にも立ぬや花の空

芳英 芹舎 若雅 南溪 並隆 万丈 太老 翁杖 草烏

降り足らぬ雨のあしたやうめのはな
はやう寝て日の出拝まむ春の海
壁ごしにきこえるおとや花支たく
洗ふときしら魚ひとつ流しけり
負ひ合て万歳わたる浅瀬かな
湯に入てもどれば内も花の春
朔日や祇園かけてのはつぎくら
言ひ出して間もなう花のさかり哉
山風にちよつとそれたるひばりかな

光影 蘿文 来元 梅窓 狐月 山狐 遊蝶 李角 喜楓

出来合て朝めし出すさくらかな
腕まくりしてもどりけり花の雨
鶉の糞ンによごるゝ花も盛かな
よそほひの日に／＼かはるさくらかな
晩―鐘はすみても花の暮おそし
うぐひすの小枝をつたふ日和かな
けふははや浪もかぶらで芦の角

(満ママ)

イト

なのはなやか ど 中に出て紡ぐるま
替え駕籠におこされて聞雲雀哉

栗哉 馬角 杉雪 赤楽 白扇 衆芳 馬友

座魚

伴橘

五〇ウ

長檠もひとつ持けり花の宿

正阿弥

山畑やあい／＼にある梅の花

夢外

初花やまた薄濁る下流れ

玉叟

暮る日に未だ人声の野梅哉

浮席

花にさへ好き嫌ひあり八重一重

醉露

炉ふさいで内には居らぬ主かな

恩古

銭こぼすおとのきこゆる霞哉

侘美

幹までも濡ぬ木はなし春の雨

杜蓼

接木して居れば飛つく小犬哉

杜鷺

五一才

食て仕廻ものには惜しゝつくくし

道ばたや捨て茶売もかすむ朝

鶯に筆のさやぬく音す也

寝時分は近し桜におりる風

水で顔洗うて来るや藤の花

摘んだあとふみ置庭の若菜哉

酒呑のおとして行ぬふきのたう

新家の木香募りけり春の雨

折て来て驚しけりはつ桜

月峰

楓関

女よう

乙雅

初六

呉明

蘇山

百池

梅價

五一ウ

ちかよれば谷ひとつあるさくらかな
ついと来た画眉鳥もゆれる柳哉
山吹や小家取たのではつとする

可大
祖郷
万籟

フンロ

蚊の出るときけば懼し花の宿

榛堂改朝陽

(濁ママ)

宝びきのはじめさはがし居りやう
折るおとに山深うなるさくらかな
しそく灯のそれにも花はこぼれけり

夙也
千崖
蒼虬

追

加

五二オ

からうじて梅折た手のぬくさかな

ビンゴ鞆

虚雅

座ゆづりに勝手の交る余寒かな

イセ松坂

椎已

鶯らしいをり／＼の声

甫列

蕨川の向ふの柳水はねて

菰猿

是から先は車通さぬ

茶栖

丁稚らが菓とりこむ昏の月

いはほ

(イイ源)

新米めしのこびる鍋くせ

布泉

下

二ウ

今朝あたり折た跡ありうめの花

シヒキ田宇栗

腥きにほひをまぜて磯の梅

志賀

すて植のえだぶり軽きさくら哉

甫列

翌日の日も案じ事なし花の空

井花

暮ながら人声高し花の山

升山

鶯のあと逐行や里のみち

加芳

つばくろのおとすや壁の枯れ柊

汲古

雉子の来るだけはふさがず垣の穴

山田潮花

常入れぬ寺もゆるすや花の時

江州アサ小井一峰

五三才

家付の梅は咲けり長屋から

アキヒロシマ静雨

店さきを貸るや松ひく身拵

蒼虬

野風に声のちぢむ鶯

宇栗

(濁ママ)

ふり売のたなごも春は活て居て

虬栗

使の者のしぼる雑巾

栗虬

まだすこし出雲の残る朝の月

作り次第の齋の粟稗

栗虬

下

三ウ

五略

曙の似よる木もなき柳かな

(濁ママ) (濁ママ)

ブンゴ 日田五流

春風や塗ぞうち乾く赤鳥居

か (濁ママ)

カバ 大聖寺豊収

とつくりと貰ふて折や梅の花

ワカサ 椎山

二三日におりごろ過てうめの花

大郭

とし寄に折て囉ふや桃の花

大和吉野 虎遊

人並に朝起もしてうめの花

玉池

つきのばす仕事ばかりや花ざかり

亀玉

去年伐た程は又延ぶ柳かな

也壘

(濁ママ)

すぐ 過て折に苦勞な野梅哉

玄々

五四才

水門の明て有なり夕がすみ

イセ津 日佐世

箒とる人ぎれしたり花の中

蟻扇

抑と垣をせゝるや花の風

照星

下萌や履物かえて庭歩行

大坂 自楽

苗代やちよろ／＼水に魚はしる

鷺雪

袋から炭出す花の小陰かな

京 霞暁

ついと来て小海老の抱くや芦の角

瑞斗

咲花の中や何伐る斧のおと

吏龍

紅梅の出過た枝に朝日哉

理芳

五四ウ

翌日もいるやうにのけたる齋かな

夙也

わするゝばかり永き正月

ブゼン小クラ可推

牛の子の鼻穴あける春風に

木父

取つぎはなき竈もとの人

推

待宵の客の手筈にひとはしり

父

萩もすゝきも弓を張つゆ

推

下略

頭痛すと上品めかす春日かな

木父

暮るゝ迄鳥啼里の余寒かな

可推

五五終才

足袋の泥もんでおるなり花の宿
朝鷄の鳴に這入るや山椿
鶯の声や鼓のそふ在所

花

供

養

梧堂
木齋
松風

五五終ウ

終

京東洞院通

湖月堂

御摺物所

菊屋平兵衛

仏光寺上ル町

(裏表紙見返し)

(裏表紙)